



## ■ 第4回 SPARC Japan セミナー 2013

「今日の問題を解く、学術情報の受信と発信

—Think Globally, Act Locally」

2013年12月19日(木) 京都大学百周年時計台記念館国際交流ホール III 参申込者:63名

2013年もオープンアクセスという情報流通について、様々な観点からセミナーが企画され、いずれの企画も盛況であったと聞きます。この締めくくりをかねて本セミナーでは、実践的な視点からインターネット上に散逸する図書資料(Eリソース)を管理する方法から、オープンアクセス資料も含む機関利用状況を把握する際の課題、購読可否の目利きに役立つ情報の読み方までを、図書館(受信)にまつわるセッションAとして組みました。また学協会・出版者が、オープンアクセスという選択肢を発信強化に活かすとしたら、どのような課題があるか、APCの仕組み、大学・研究機関あるいは研究コミュニティではどのように捉えているかという視点に立ちセッションBを組みました。欧米に学ぶオープンアクセスは、日本における発信の道を切り開くチャンスとなるのか—聴講者も参加し共に考える場として、2つのセッションを各5名のファシリテーターのリードで進める挑戦的なセミナーであったと思います。なお本セミナーの副題は、6月にサンフランシスコで開催された学術出版学会(Society of Scholarly Publishing)でのセッションテーマから取ったもので、世界地図の中心がどの国であっても、世界を知り自国で展開する試みが世界共通のテーマであることを表しています。

### 【京都大学におけるEリソース管理の現状と課題】

塩野 真弓(京都大学附属図書館)

京都大学ではERMS(電子情報資源管理システム)を中心としたEリソース管理を始めて6年が経過した。Eリソースのスムーズなナビゲート、安定的な提供を目的として、リソースの費用対効果が最大となることを目指している。管理面については、契約/ライセンス情報や価格情報、アクセス管理などの情報を集約、蓄積し、共有が可能になっている。また、Knowledge Baseを中心としたEリソース管理により、世界中で収集された最新のメタデータが利用できる。パッケージを契約単位でプロセスできるのも利点である。しかし、一方で、問題点もいくつか存在する。

一つめは、メタデータに関する問題である。特にオープンアクセスジャーナルや国内タイトルのメタデータが不足していることが挙げられる。出版社によって、ライセンス情報の表現に統一がとられておらず、入力に手間がかかる。また、論文レンタルや個人登録すると読むことができるタイトルへの対応ができていない。更に、メタデータの粒度は基本的にはTitle単位であり、Article単位のメタデータはない。例えば、部分的にオープンアクセスとなっている、Hybrid OA Journalなどにナビゲートできていない。網羅的なジャーナルの提供体制を確立することが今後の課題である。

国内タイトルにおいては、ERDBプロトタイプ構築プロジェクトで一部改善される可能性がある。ERDBとは、いわ

ば、NACSIS-CATのEリソース版で、ライセンス情報、JUSTICE交渉タイトルや国内のフリーのメタデータなどが集約されるというものである。

問題点の二つ目としては、リソースの評価に関する点である。京都大学では統計ツールは未導入である。そこで、各出版社のCOUNTER<sup>1</sup>準拠レポートや、契約タイトルリスト、プライスリストを基にCost Per Use(ジャーナルごとの論文1ダウンロード当たりのコスト)を算出しているが、キーとなるべきISSNには間違いも多く、作業に困難をきたしている。できるだけ多くの流過程に統一のIDが欲しい。

それに加えて、オープンアクセスジャーナルの評価については、APCの額を把握していないため、購読タイトルとの比較ができない。また、Hybrid OA Journalの場合、Article単位の利用統計が必要となる。

評価基準については、Cost Per Useを算出できたとしても、一概にそれだけをもとにリソースを評価することは

<sup>1</sup> COUNTER(Counting Online Usage of Networked Electronic Resources): オンライン情報サービスの利用統計を標準化するために、図書館員と出版社により2002年に設立された非営利団体。信頼性があり、比較可能で、一貫性、互換性のある利用統計(usage statistics)が必要であるとの観点から、COUNTER実施規則(利用統計のフォーマット)が全世界の図書館員、出版社、仲介業者やその職能団体によって遵守されている。(『電子資料契約実務必携』大学図書館コンソーシアム連合 [http://www.nii.ac.jp/content/justice/documents/justice-companion\\_excerpted\\_201203.pdf](http://www.nii.ac.jp/content/justice/documents/justice-companion_excerpted_201203.pdf)より引用)

きない。評価基準として何を採用するのかということも課題の一つである。

### 【NIMS 材料科学図書館の電子リソース管理】

田辺 浩介(物質・材料研究機構)

物質・材料研究機構(以下 NIMS)図書館では、Eブックを含めて 25,000 冊の蔵書とオンラインジャーナルは約 660 タイトルの材料科学分野を中心とした資料を提供している。予算と価格高騰の兼ね合いもあり、新規購入図書は Eブックを原則とし、オンライン版がないジャーナルは購読中止とするなど、Eリソースへの集中投資がなされることになった。その中で、Eリソースの利用情報の把握は Eリソースの評価を行う上で喫緊の課題である。

NIMS では Eリソースの利用コストの計算を少ない手順で安価で行いたい、また従来は手作業で HTML の更新により Eリソースの一覧を管理していたが簡便に行いたいなどの要望があり、Eリソース管理システム Next-L Enju ERMS(以下 enju\_erm)を独自開発し、Eリソース管理を行っている。enju\_erm では、電子リソースの書誌情報管理、契約情報管理だけでなく、SUSHI<sup>2</sup>による COUNTER 統計の取得、書誌情報・契約情報との照合によるジャーナルごとのコスト計算などを行うことができる。具体的には、ジャーナル情報、契約情報や利用統計(SUSHI による取得)を enju\_erm にインポートし、それらが、図書館ポータルや、Cost Per Use の算出表、利用可能な Eリソース一覧リストなどそれぞれに反映される仕組みになっている。

システム運用後の課題としては、契約情報の enju\_erm への入力やや複雑であり、それらを簡素化することが挙げられる。また、サイト維持費やバックファイルの価格など、パッケージ内でジャーナル価格の案分方法を設定できるようにすることなどがある。

Eリソースの評価においては、様々な手段が挙げられる。もともになる統計としては、出版社ごとのダウンロード数、ジャーナルの分野ごとのダウンロード数、などがあるが、SCImago Journal & Country Rank<sup>3</sup>や CWTS Journal Indicators<sup>4</sup>などの他のデータベースを参照し、参考にすることもできる。また、研究者の声を直接汲み入れて評価

するというのも一つの方法である。どのように重みづけを行うのが課題となっている。

### 【近年の学術情報流通の意識と動向

#### — 学会誌のオープンアクセス化など】

村山 泰啓(情報通信研究機構)

情報のオープン化は単に学術雑誌だけにとどまらず、オープンガバメント、科学研究データの共有など広範にわたる。G8 サミットでは原則としてのオープンデータが議論され、オープン化先進国である英国王立協会は「公開事業としての科学」という報告書を公表している。近代科学は古くから研究情報の発信とともに発展してきている。17 世紀に王立協会が発行した *Philosophical Transactions* が学術誌として情報流通に世界で初めて成功したとされる。科学的研究成果・発見を公開し、その検証可能性・再現性を担保する情報流通制度は今日の科学技術研究活動を構成する重要な要素といえる。従来主流であった紙媒体による出版に次いで、今後は電子媒体も非常に重要な手段となる。原著論文だけでなく、研究成果の再現性を担保するためのデータを「出版」できる体制・手法の議論・試行が国際的にも進められている。しかし電子媒体による長期の学術情報マネジメントはまだ課題もあり、紙媒体との関係や、公開すべきデータの評価・品質管理等の方法論確立は今後も取り組むべき課題と言える。ここで地球惑星分野の 5 学会が出版する欧文誌 *Earth, Planets and Space* (EPS 誌) のオープン化について紹介したい。EPS 誌は Springer からの出版によって 2014 年から完全な Open Access となる。立ち上げ期は研究成果公開促進費を利用して刊行するが、いずれ自立したいと考えている。最初は掲載料を低く設定し、Letter 論文、特集号や Invited paper、途上国からの投稿も優遇することとしている。計画調査では、投稿の半分以上が Letter となり、インパクトファクターも 1.5 (2014)から 1.8 (2016) 以上となることを最低限の目標とした。東日本大震災の特集号が成功を収めたのは未曾有の大災害で世界中の注目を集めたという特殊な事情もあるが、OA 化は情報オープン化という大きな流れの中で必至であり、世の中のニーズにも合った選択だろうと考えられる。

### 【学術誌 OA 化を実践してわかったこと

#### — 研究者コミュニティからのメッセージ】

野崎 光昭(高エネルギー加速器研究機構)

理論物理研究者の中では有名誌だった *Progress of Theoretical Physics* (PTP) は 2012 年に OA 化し、実験系の論文も受けつける *Progress of Theoretical and Experimental Physics* (PTEP) 誌として生まれ変わった。この OA 誌は KEK や理研など国内の中核 6 機関から支

<sup>2</sup> SUSHI(Standardized Usage Statistics Harvesting Initiative):2005 年に米国情報標準化機構(NISO)が開始したプロジェクトで、COUNTER 準拠の利用統計データを自動的に取得できるプロトコルを開発することを目的としている。すでに ANSI/NISO Z39.93:2007 としてプロトコルが規格化され、SUSHI プロトコルに対応している出版社は 2012 年 2 月時点で 38 社ある。(『電子資料契約実務必携』大学図書館コンソーシアム連合

[http://www.nii.ac.jp/content/justice/documents/justice-companion\\_excerpted\\_201203.pdf](http://www.nii.ac.jp/content/justice/documents/justice-companion_excerpted_201203.pdf)より抜粋して引用)

<sup>3</sup> <http://www.scimagojr.com/>

<sup>4</sup> <http://www.journalindicators.com/indicators>

援を受け、KEK の加速器を用いた国際共同実験の実験論文を出版することもできた。過去 1 年の投稿状況を見ると 4 割程度の掲載率で海外からも相当数の投稿がある。現在の刊行体制をみると科研費による補助のお陰で大きな自由度が生まれている。今後、科研費が無くなった時の体制を考えると、掲載料の他に機関支援や SCOAP3 からの収入が重要になる。SCOAP3 とは素粒子物理学の研究機関がチームを組んで出版社と交渉し、特定の雑誌を OA 化させる代わりに各機関が出しあう資金から掲載料を一括払いする国際連携である。現在 15 カ国 18 機関が参加し、日本からは NII が署名している。多くの機関がまとまるほど資金を確保でき出版社への交渉力が強まる。米国は参加していないが、主要誌が OA 化して購読料が削減された分は SCOAP3 に拠出しており、大国の矜持を感じさせる。この例からも、雑誌の OA 化は適切な掲載料を設定すれば可能であり、科学先進国がそうでない国を (OA 化を通じて) 支援する体制づくりは当たり前である。日本は経済大国である以上、それなりの貢献を期待したい。素粒子分野は国際的なまとまりが強く SCOAP3 という連携が可能だった。国際的な研究協力の好例である。

## 【グループディスカッション】

### ■ 討論テーマ ■

- A: E リソースの目利きーネットに散在する様々な学術情報資源の分析と判断
- B: オープンアクセスの実情ー新しい出版モデルの出納帳

### ～参加レポート 1～

グループディスカッション、テーマ A では、「E リソースの目利き」として、年々数が増加、かつ価格高騰している E リソースの取捨選択時の客観的分析材料として COUNTER のデータを利用していること等を先行機関の皆様から教えていただいた。テーマ B では「オープンアクセスの実情」と題して議論した。その中で「同じレベルの雑誌であればできれば OA 誌に投稿する。理由は、自分が OA の恩恵を受けているから。」と質問に回答された研究者の先生の言葉が大変意義深く感じた。研究者の一部の方かもしれませんが、OA の着実な浸透を実感した。

私は今回初めて、近隣の京都大学での開催のおかげで、SPARC Japan セミナーに参加できた。HP 等を適宜チェックしていましたが、読むだけでは得られない情報等があることが、参加することで気付いた。本学も今回得た情報を参考にして、早々に体制を整えなければならない。ぜひ、今後も NII 開催だけでなく全国各地でセミナーの開催やネット中継等をしてくれるよう希望する。

### ～参加レポート 2～

私のグループでは、昨今の価格の高騰・円安等のために、「どのコンテンツの購読を打ち切るか」という観点で E リソースを評価している機関の方が多かった。COUNTER による統計を用いて、各コンテンツの 1 アクセスあたりの単価を算出し比較するという評価法が主流であったが、その方法のみで E リソースを評価したところ、特定の分野のタイトルが 0 になってしまった、という事例もあった。利用度の可視化・数値化が容易になった今、例えば数学は他の自然科学分野に比べて 1 つの論文をじっくり読む傾向がある等の知識に基づき、利用度という数字をさらに一步先で、合理的に活用できる能力が図書館員には求められていると感じた。

後半の OA のテーマでは、様々な立場の参加者により OA についての議論が交わされた。RSC のパッケージ契約に付随してきた APC のパウチャーについて学内研究者に告知をしたが、意外と利用がなかった、という図書館員からの報告に対し研究者の方から、APC というものについての情報発信にも、図書館は注力する必要がある、と指摘をされた。また OA により論文のインパクトが増すということは既に証明されているし、自分自身も OA を好んでいる、という研究者の声を聴くことができたのは、大きな励みとなった。

### ～参加レポート 3～

私は Group 3 に参加しましたが、テーマ B (OA の実情) については、SCOAP3 の意義に関する議論が主となりつつ、出版に至るまでの総コスト (主に人件費) を下げる方法がなく、研究者が本数確保のために内容の薄い論文を多く発表せざるを得ない背景に言及があった。次にテーマ A (E リソースの目利き) について、COUNTER の概要の確認と参加者勤務先の EJ の COUNTER 提供状況、外為相場、大学出版会からみた出版事情について討論した。

討論の感想としては少し飛躍するが、上述のような学術論文の出版のあり様が改善されるために、図書館が誰に何をフィードバックしていくべきかが課題だと思った。編集コストを嵩ませる習慣は雑誌の存続に関わりかねず、その改善は、アクセスする読者の時間やコストの節約に繋がるからだ。

今回のセミナーではその他にも、OA 誌の会計事情の具体例を聞くことができた点でたいへん貴重な機会になった。

### ～参加レポート 4～

電子リソースは今日の教育・研究活動において不可欠なアイテムとなりつつあるけれど、具体的なことは難しそうによくわからない。つつい敬遠したくなるが、多少なりとも理解を深めたいと地方開催 (日帰り参加可) の SPARC セミナーに参加した。

多様な発表者からレクチャーの後、グループ討論形式というセミナーは新しい試みらしい。参加者の立場や理解度も多種多様で議論を発展させるのは容易でなかったと思うが、ファシリテーターの支援のもと、ここでしか聞けないざっくばらんな話や意見もあったことだろう。初心者レベル

## -----参加者から-----

(大学/図書館関係)

- ・非常の興味深い、濃い内容でした。他の大学の状況も伺うことができ、大変有意義でした。
- ・COUNTER の活用方法を伺えたのが大変役立ちました。今後は是非大学内で活用します。
- ・研究者の方とフラットな場で議論できたことが非常に貴重でした。研究者の方にとってのOA誌投稿のインセンティブをお聴きできてよかったです。
- ・SPARC でディスカッションは初めてでしたが、とてもよかったです。
- ・EJ・DB 管理はどこの大学も同様の悩みを抱えていること、様々な工夫を試みていることがわかった。
- ・普段の図書関係のイベントと異なり、実際に研究者からOAについてのお話が聞けて、大変勉強になりました。
- ・NII 以外の場所で行ってくださると、とてもありがたいです。

## -----企画後記-----

☺ 冒頭でも触れましたが、今回のセミナーは聴講型ではなく参加型の企画として、SPARC セミナー史で初の試みでした。当初は懐疑的な意見もあった中で、開催まで漕ぎ着けられたのは、随所にNIIコンテンツ課からの気の利いたサポートがあったからこそと思います。さらにファシリテーターとして、各分野で活躍する方々、また学術情報流通の主役である研究を本業とする方々が、立場等しく参加し、現役の証人として議論を盛り上げてくださったことも大変に重要な要素でした。この場を借りて企画して下さった各位に深く御礼を申し上げます。

物質・材料研究機構 谷藤 幹子

でどこまで理解できたか不安だが、どこでどのようなことがあるのか現状を知り、関連用語を耳にすることで勉強になったと考える。また、研究者と図書館関係者等との交流も、複雑な課題・問題に取り組んでいくうえで意義深いことである。今後も多くの人の参加を期待したい。

す。グループディスカッションが大変有意義でした。

- ・研究成果の永続的な保存の担保など、図書館のあまり意識されていない役割についても、意識的な研究者の方もいるのだとディスカッションの中でわかり励まされる思いがしました。

(学協会/学術誌編集/関係)

- ・学術情報の受信者と発信者がディスカッションすることで、色々な情報を得ることができて有意義でした。両者の意見交換はとても重要と感じます。

(企業/学術誌編集/関係)

- ・年に1回か2回、京都で開催して欲しい。今回のようなディスカッションは参加者の声も聞けてとてもよかったです。ありがとうございました。

(その他/その他)

- ・双方向のディスカッションが新鮮でした。各講師の方々のプレゼンも素晴らしかったです。

☺ 様々な分野の人がディスカッションに参加してくれて良かったです。このNewsLetterも内容が濃いので、得られた知識や情報をまとめ、次回以降につなげる工夫があるとよいです。

国立遺伝学研究所 有田 正規

☺ 参加者の声からも分かるように、「学術情報の受信と発信」という大きな課題について、身近に感じるということが実感できたセミナーでした。本セミナーの体験を踏まえて業務に生かしていきたいと感じました。

京都大学附属図書館 東出 善史子